

COSMOS集



あと十年保証しますと言はれたる卒寿の夫のペースメーカー

すずめ 引間 三郎*埼玉

ひと夏の命を終えて逝きし蟬土に帰れと落葉に埋めぬ

鎌で刈り稲束掛ける掛け竿の増えて夕陽よ待つてくれたか

稲刈りの終わりたる田に雀群れ落ちいるモミをついばみており

稲刈りで賑わいし田は荒れ果てて雀の数は減つてゆくなり

生きるのに見栄はいらぬと言ひし祖母明治生まれで農家に生きて

里の小川 吉弘 藤枝 埼玉

人類は三度目の過ち犯すのかヒロシマ、ナガサキ忘るるなかれ

暑き日が続けば思ふ里の小川今でもメダカはゐるのだらうか

洗ひ場の消えて暮しの変はるらし里の小川に人影のなし

桑畑は果物畑に変はりゐてブルーベリー狩に里は賑はふ

天国につながる電話があらまほし近ごろ地球は暑すぎるので

ワ行の穴 荒川 ゆみ子 東京

〈珍しい〉とありふれてゐる〈の〉中間の鷺が田舎の景色にをりぬ

道の端のゑのころぐさがソワソワとかまつて欲し気に穂を揺らして

五十音表のワ行の穴の中祖母の名前の〈エ〉が潜んで

不器用な人のたましひ乗せてゐる やうやう着地を果たすガガンボ

ひがんばな多き町なりつはもの夢の絶えたる跡をめぐれば

水上 美季選

キャンパスの森 高橋 みどり*イギリス

つつがなく大事にされているかしらビッグモーターで買われし愛車

人気なき朝のキャンパス疑問符のごとき尾を立て栗鼠の横切る

小雨降るキャンパスの森に迷い来てかささぎの黒き尻を踏む

八時間先の日本のぬばたまの夜にランチの画像を放つ

休日も二十四時間店が開くことを求める国にいたのだ

怒の一字 尾形 久子 群馬

怒の一字大きく描きしTシャツを着るウクライナの少年映りぬ

「おうい雲よ」山村暮鳥をまねてみぬ行つてくれるか子の住むチロルへ

支払ひ機の手順やさしく教へくれるコンビニのひとは外つ国の人

つぎつぎと花をつけゐる千日紅たばねて参らむ秋の彼岸会

大野 英子選

わたしの未来

杉 沢 千 恵 東 京

つくつくほふしの声かぬまま行く夏の雲やはらげど淋しかりけり
ひと雨のあらばと待ちし今日もまた37度とテレビは報ず
ひぐらしの声さへ聞けず夏は去りシャインマスカットの緑がすがし
何気なく過ぎ来し日々よ秋くればなほ細りゆくわたしの未来
宿の下駄履きて真夜まで踊りたる郡上の盆唄テレビが映す

スイーツのごと

三 和 今日子 東 京

風さやさや夏の終はりの木に立ちぬ樺大樹のその大きさを
だんだんと動かなくなりこの夏は朝な朝なに瞑想をする
人間には機嫌のありてVRの菩薩のやうな美女とするヨガ
風に乗るスイーツのごと舶来のシャーデンフロイデいまここにある
走りたる老女がバスに間に合ったフロイデンフロイデ駆け抜けて行く

日曜の朝

磯 貝 恭 子*新潟

指先に青の絵の具を付けたまま月曜朝の身支度をする
キャンバスの絵の具の厚み増すばかり終わり見えない雪景色描く
理容室の鏡の奥に降りそうで降らない空の雲垂れ下がる
理容師の鋏の音の小気味良く一センチずつ髪落としゆく
早起きの猫の寝坊で家じゅうが寝坊してます。日曜の朝

いつも満開

高 橋 梨穂子*新潟

春にしか行ったことない町がありわたしのなかではいつも満開
ひまわりのおいを思い出せぬままひまわりだという線香を嗅ぐ
「いかない」とジャングルジムの内側に籠城しているわたしのことも
煙火筒いつも地上に残されて重いからだだただ上を向く
散る花の最後のひとかげまでずっと この感情はきつと「いとしい」

小 さ き 声

小 森 鈴 子 岐 阜

上がりたる八号玉の大花火本巢もとすの大気をドーンとゆらせり
背骨折り禁じられたる草むしりエノコログサがさわさわ揺れる
あでやかに数河すごうの獅子が舞ひ終へぬ今年が最後となるといふ舞
退院せしばかりの夫が言ひくれぬ「寝ないかんよ」と小さき声にて
みどり濃き新芽をのこしバツサリと茄子の枝切る真夏日の朝
水上 比呂美選

木 通 の 実

青 木 紀 子 愛 知

小雨降る街に信号待ちをれば忘れたき事また浮かび来る
天折の青木繁の「落葉径」空気や音も伝ふることし
紫の熟し割れたる木通あけびの実白き果肉を見せあて妖し
吾が好きな果物の字に「木」が目立つ桃、柿、林檎、杏と蜜柑
出す人の人柄見せて並びをり毎週火、金の生ごみ袋

糸瓜ぶらり 福本郁子*京都

湖^{うみ}わたり若狭路行けば猛々しき雲は流れて行き合ひの空
三方五湖を見おろすリフトに乗りたればトンボと共に空を行きけり
夕顔の蔓は支柱を登りつめてつべんにふわり花を咲かせぬ
おそ夏に糸瓜ぶらりと下がりおり居心地悪き老年期かな
この夏の余熱で縁の溶けたるか潤んだ大き月の昇れり

ウールジャケット 小野久美子*兵庫

八月に山本^{にぎろ}二三氏旅立ちぬ空には二三のむくむくの雲
水色のゼリーのなかであざやかな赤い金魚が泳ぐ白昼
毛刈りショーでウールジャケットぬがされて抜け出た羊が山羊のようなり
「いつにする」日を決めるとき友たちはスマホを開き我れ手帳を開く
風呂敷が一升びんを包むとき形にそつて立体となる

編笠の項 畑都*鳥取

岩を打ち高く飛び散る白波を車窓に見下ろし向かう城崎
川べりの足湯の熱きに耐えおれば柳を抜けて来る風涼し
夕さりに縁側に聞くひぐらしに西瓜を困んだ遠き日想う
竹藪の小道を行けば鎌を打つ姉さん被りの祖母に会えそう
編笠の白き項の乙女らはおわらの調べに指先まで舞う

赤き民族衣装 新宅道和田広島

純白のパンプス履きてすつと立つ壇れいを見た鄧麗君^{テレサテン}墓所に

台北から電車とバスとタクシーを乗り継ぎ着きぬテレサテンの墓
「敬老」の二文字印刷されてをり台湾の電車の割引切符
看板の丸きに以^イ撤^{イサ}小屋と書かれをり泰雅族^{タイヤル}のイサさんの店
紐の輪にボタンを嵌める泰雅の赤き民族衣装を着て撮る
齊藤 梢選

喜びの音 宮地正志 香川

台風で倒れし稲を株ごとに起こす作業に精出す人あり
蟬の声遠ざかりゆく山里に稲刈りをするコンバインの音
実りたる稲を刈り取るコンバイン最後の仕上げ喜びの音
猪の足跡続く農道に沿ひて除害のネットも続く
デジタル化世の変遷に追ひつかず孤立が進む老いたる己

今は順調 江崎玲子*福岡

庭仕事する人もなくお隣の給湯器に這う藪枯らしの蔓
弾け飛ぶ鳳仙花の種さながらに娘は遠くスイスへと飛ぶ
誰の血を濃く受けたのか語りあう子供ら四人一周忌の宵
魂が口からぼっかかり抜け出したような寝顔の息子は亡夫似
家事労働単調なりと若き日は思えど今は順調と思う

少年像 垣野幸一*長崎

診療を待つわが前を行き交える足音それぞれ悲しみを秘む
幸せはパッチワークにいそしめる妻のかたえに昼寝するとき

バスを待つわけではないがバス停の椅子に腰掛け蒼空仰ぐ
爆風に吹き飛ばされし鐘楼を子どもに見せ石段くだる
手をつなぐ親子ふたりが原爆の少年像にお辞儀して去る

有りの実 木場 美枝子 鹿児島

徳之島の西北西の深海に戦艦大和今も眠れり
肉ジャガに初挑戦の三年生「うん、うまいね」と自画自賛せり
弟はしあはせオーラにじませて初孫見んと神戸へ飛び
MRI生きる難儀が身に染みる「ガッタン、ゴトゴト、キーツガッタン」



富士 りか選 「その二集」特選

うろこ雲 大桃 小やゑ 北海道

水底より空見上げたる気持ちせり昼の太陽おほふうろこ雲
雲ひとつなき秋の空ほんたうは鳥だけのためにあつたのだらう
公園で幼子に言ふ母親の声のやさしさ「おはなきれいね」
萩の枝をふんはりゆらす秋の風今宵語らむ手折りし枝と
わが道をえらぶがごとく立ち止まる押しボタン式信号機前

贅沢に大きな有りの実ほほばれば悲しきこともしばし忘るる
茶 柱 丸山 克介 鹿児島

八十の吾が人生を占ふや今朝の湯飲みに茶柱の立つ
実の何個この台風能耐へ得るや庭の柿の木激しく揺るる
小銭など机に広げ数へをり熱中症に世の騒ぐ昼
爪を切り髪を整へ図書館に一日森村誠一を読む
自分から「塾に行かせて、頑張る」と中一少し成長したり

かなかな 水鳥 葉子 茨城

火葬してくづれし妣の骨の中に一点黒き人工関節
かなかなと今年最後の蟬の声 地球は生と死包みてまはる
幼な日にガミミといふ名の犬のゐて「ガミガミガミ」と呼ぶ声懐かし
秋の日ははからはからと駱駝に乗り老いといふ名のフロンティアゆく
山門にマッチョな阿吽仁王像 風に眼球磨かせてをり

鶴を折る 谷川 恵崎 玉

丁重な手紙届けば幾度目かの値上げの知らせまた鶴を折る

「エビデンス」の代はりに医師のぼそと言ふ「お祓いに行ったほうがいいかも」健康しか取り柄がないといふひとの強さを思ふ　また陽が沈む鈴虫のこゑは二階によく響き姿見えねど秋ここにあり
ペランダに置かれたままのクロックス縮みて夏の強さを知りぬ

蝶の軌道

清水美里*東京

野分して蝶の軌道を目でなぞるあなたに話せないことばかり
J R 日暮里駅北改札、子は振り返ることもなく行く
カーテンを引くのが雑な医師の目は絶対見ないことにしている
定例のラジオ体操泣きながら向かう心と身体は別だ
己が身に浮くあばら骨病院のシャワールームの小さき鏡

繭の空間

山口文*東京

ずつしりとぬくいおほぎを抱いたよう眠れる稚児の生きてる重み
白ネギのような腓のはずだった今の息子は剛毛丸太
行つてきます笑顔を向ける長男を笑顔で送る消化器検査
ひじき豆ご飯に混ぜて子の口に運んでる朝母は戦士だ
ドライバーは夫と息子が半々に繭の空間とろける眠り

原質 嚶子選

ホッポローロード

金子英子*新潟

縦列に車は並び乗船の順番待ちするカーフェリーの旅
空がより広い気がする札幌の自動車道を走る朝五時

ぷつぷつとテントに当たる雨粒の音聴き寝入る秋の羅臼で
雨に耐え風に夜露に耐えて立つタープの下で味わう朝食
国道の名に苦笑する韻を踏み誰が付けたかホッポローロード

水道局の夜

梅沢佳子*静岡

履き替えた靴に声かけ梅雨の間の夜風の中へウォーキングに出る
月明かりする公園のシーソーのイルカとシャチは眼を開け眠る
八時半老犬二匹に導眠剤与えて憩う吾のひととき
踏切りの近くに住む人当直にその音なければ眠り難しと
当直にマイ枕持ち出むくとき水道局の夜は長けん

風穴

池田あつ子愛知

この酷暑われは読みたし風穴まげつちの如く冷気を吐きだす歌集
青虫をつぶさず入れしごみ箱を今朝あげたれば黄蝶舞ひ出づ
人生は甘くないよと声のして今日のわたしは腰痛に泣く
終点まで乗りし事なき路線バス知らない町へこのまま行かう
夜の闇深まるにつれ切々と語りはじめる庭のコオロギ

付箋

岩館澄江*愛知

炭酸のイタ気持ちいい間隔はきつとDNAもおぼえた
深すぎる地下鉄エスカレーターに足がすくんだ中一の春
エルメスでしか埋められない生活がこの世にあって別の世界だ
「コスモス」に付箋いっぱい貼り付けて教えてくれたひと　ありがとう
シャツターと窓のあいだで死んでいた蟬の亡骸しばし飾った

逆光 小田 沙也加*愛知

ひねつてもひねつても水しか出ない赤の蛇口を殴る夕暮れ
随分と炎を直に見ていないオール電化はさくさく進み
大学院入試つつがなく終えて二十二歳の帰路を歩めり
足元に下向きの花 明るすぎても逆光になるだけだから
流石でもなんでもないので流石だと言われて底なし沼だ心は
松尾 祥子選

カキーンの音 浦木 妙子*鳥取

小さき手でうーんと引けば次つきと産まれる芋は紅はるかなり
蒸したての芋は重くて熱あつで園児の頬は紅色になる
空高く流れる雲に急かされて茶色のチュニツクとり出す朝
初めての野球観戦入り待ちのファンに混ざりてスマホ構える
村上のカキーンの音に目が覚めて眠気も夜空にぶつ飛ばされる

棲み分け理論 日野 幸吉*広島

孫に似る児童に声をついかける不審者情報流るる町で
「アレですよ」老いよく使うに関西の人らの「アレ」は阪神優勝
カチカチと刻みて時の過ぐる世に時なく川の流るるを見る
老い夫婦時間・空間ともにせず平和共存「棲み分け理論」

山の端をぐざりと刺して三日月はたそがれ残る空に輝く

リコリス 白井 玲子 佐賀

留守宅の庭のリコリスそつと咲きそつと枯れゆくあはき桃色
夕暮れてあかり灯らぬ隣家の窓から闇は忍び込みたり
翅破れたるクロアゲハはばたけど落ちてしまへりにはたづみへと
黒川の溪谷に生ゆるウツボグサ、コウホネ、アマチャ薬草あまた
膝痛の友はなにゆゑ釈迦院の階段を登らむと誘ひ来

磯の香 原 万紀 長崎

杳き記憶のわがふるさとよ海の辺の潮の匂ひと浜木綿の花
海ほほづき鳴らして妹と遊びたる記憶の中の磯の香を恋ふ
炎天のオクラの花へひたすらに登るも下りるも声持たぬ蟻
飛び立ちし命いづこか空蟬は柿の葉に縋り雨にぬれをり
酷熱の鄙をジャジャーと消炭にすること夕立はげしく降り来

停止ボタン 小森田 より子*熊本

秋庭にアラームのごと鳴く虫の停止ボタンは見つからなくて
喉かわきぐつたりしている児のように鉢植えあじさい吾の水をまつ
じょうろでは間に合わないときあせたバケツである今日の水やり
にがうりの熟れてはじけて赤き種ほのかに甘い香りを放つ
夕暮れに稲妻はしる切れかけの冠状動脈うつすがごとく